会報
ともしび

発行所
一般財団法人
広島県動員学徒等犠牲者の会
事務局
広島市南区比治山本町12-2
広島県社会福祉会館内
〒732-0816　電話(082)252-0316
印刷所　Taisei

デジタルブック
“慟哭の証言”
http://www.douingakuto.com/

追悼式を終えて

理事長　本地正治

今年も８月６日に恒例の原爆追悼式を挙行いたしました。

式典開始直後の８時15分に、慰霊塔前広場にご参集の皆様全員で、黙とうを捧げました。

以降は、理事長式辞、次いで、県知事様、市長様、修道中学校・高等学校生徒会長様の順で追悼のお言葉及び献花をしていただきました。式典中は、ご来賓・役員席及び一般・会員席ともにほぼ満席状態でした。式典終了後、10時までは、広島市の平和式典参列を終えられた、国会（20名）、県会（13名）、市会（８名）の多くの議員の皆様（合計41名）に、三々五々にご参拝いただき献花をしていただきました。厚くお礼申し上げます。

また、従来どおり、名簿閲覧、お供えの受付、参拝者への案内チラシ配りを12時まで行い、式典を終了いたしました。

また、当日の、会員、一般の慰霊碑への参拝者は、最近では一番多かったように思います。

当日は、今夏で一番の暑さ（37度）でしたが、無事追悼式を終えることができましたのは、これはひとえに、参加役員の皆様方の献身的活動によるものであり、日ごろから当会を物心両面にわたって、お支えいただいている会員ご一同様のおかげでございます。理事長といたしまして心から感謝申し上げます。誠にありがとうございました。

式典終了後に役員のある方（66歳）が、「私は役員の中では若いほうですが、皆様は、ご高齢にもかかわらずよくやられますね。いつも感心しています。私は汗でビショビショです。」と語っておられました。前日は早朝から慰霊塔周辺の清掃・読経・式典打合せを行い、式典当日も、午前７時過ぎから12時まで、清掃、式典参列、各種受付、参拝者へのチラシ配りなど、半数以上が75歳以上の役員の方々の、汗だくでのご活躍、頭が下がる思いです。

この役員の皆様の頑張りは、当会創立以来の会員及び役員の皆様の、〝被爆死学徒を慰霊するため！〟という尊い活動精神が、67年もの長きにわたって、綿々との引き継がれていることの証左と、感動いたしております。

また、平和記念公園周辺は、炎天下にもかかわらず午前７時ころには、ヒト、ヒトであふれかえっていました。新型コロナによる規制が日本を始め世界的に解除されたせいでしょうか、日本人はもとより外国人観光客をとても多く感じました。スマホ片手に、原爆ドーム、動員学徒慰霊塔の写真を撮りながら、興味津々の態でした。国内外の〝原爆の悲惨さ、戦争なき平和〟への関心の大きさを表す事象とも思われます。この日、平和公園を訪れたほとんどの人々が、〝ヒロシマの原爆による悲劇は、絶対に繰り返してはならない！〟との思いを、心に深く刻んでくれたことでしょう。

第67回原爆死没者追悼式

式次第（敬称略）

一　黙祷
一　式辞
一　来賓追悼の辞
広島県知事　湯﨑英彦
（代読　健康福祉局
社会援護課長　六箱栄子）
広島市長　松井一實
（代読　健康福祉局保健部
医務監　宮城昌治）
一　学校代表生徒の追悼の辞
修道中学校・高等学校
生徒代表　秋本陸玖
一　ご来賓等献花者
（衆議院議員）
岸田文雄　平口　洋　斉藤鉄夫
新谷正義　寺田　稔　佐藤公治
小林史明　小島敏文　畦元将吾
空本誠喜　石橋林太郎　日下正喜
平林　晃　泉　健太　玉木雄一郎
（参議院議員）
森本真治　宮口治子　三上絵里
谷合正明　山本博司
（広島県議会議員）
柿本忠則　中原好治　山下智之
窪田泰久　鷹廣　純　蔵本　健
竹原　哲　岡部千鶴　瀧本　実
畑石顕司　山木　茂　灰岡香奈
砂原崇弘
（広島市議会議員）
西田　浩　岡村和明　西佐古晋平
幸城麗子　平野太祐　定野和広
三宅朗充　川口茂博
（広島市遺族会）
副会長　中島百合枝
（修道中学校・高等学校）
高校教頭　上田道浩
實光賢彌　村岡駿兵

式辞

理事長　本地正治

本日ここに　広島県動員学徒等犠牲者の会　第六十七回原爆死没者追悼式を挙行するにあたり、動員学徒、女子挺身隊員として出動中に被爆し犠牲となられた七千有余名の英霊に対し深甚なる哀悼の誠をささげるものであります。

今回の追悼式に際しましては、このように　ご来賓、ご遺族のご臨席のもとに開催できましたことを　幸甚に存じているところでございます。

第二次世界大戦終戦直前に、労働力不足を補うために日々動員されていた学徒は　全国で三百四十万人にも達し、当時最大の危機にあった軍需産業の支柱的な役割を果たしていました。

空襲その他による学徒の死亡者数は、全国で約一万一千人に達し、そのうち広島の原爆による死亡者数は約七千二百人と一番多く、　また中・高等学校の一・二年生が中心であった建物疎開作業中の動員学徒の死者数は、約六千人にものぼりました。

青春の輝きと学業の本分を、あたら犠牲にし戦禍に倒れ、祖国に殉じた学徒のことを、私たちは努々忘れてはなりません。

当会は原爆死した動員学徒等の英霊を慰霊するために、昭和四二年にご御遺族を始め多くの有志の皆さまからのご寄付により、当地に慰霊塔を建立いたしました。

現在は二十数名の有志会員により、月一回の西向寺における読経と、月二回程度の慰霊塔周辺の清掃を行い、英霊の慰霊に努めているところでございます。

今年は五月に、当地広島で先進七カ国首脳会議が開催されましたことは、記憶に新しいところでございます。この開催期間中に各国の首脳が、平和記念公園を訪れ、そろって原爆資料館を見学し、被爆者と対話するなど、少なからず被爆の実相に触れ、慰霊碑に献花し、敬虔なる祈りをささげたことは、「あらゆる核は絶対悪である」と訴え続けている被爆地広島での首脳会議開催の意義を示す、大きな成果であったと思います。

米国のバイデン大統領は、原爆資料館で、「この資料館で語られる物語が、平和な未来を築くことへの私たち全員の義務を思い出させてくれますように。世界から核兵器を最終的に、そして永久になくせる日に向けて、共に進んでいきましょう。信念を貫きましょう！」と、芳名録へ記帳されています。

この記帳のとおり、世界の国々が共に力を合わせて、核兵器廃絶の早期実現に向けて効果的、具体的な取組みを、力強く進めていただくことを切望して止みません。

当会といたしましても、原爆の犠牲者である動員学徒の無念さを忘れず、平和への切なる思いを継承し、「核兵器のない平和な世界の実現」に向けて、原爆の悲惨さと平和の尊さを末永く語り継いでまいりたいと、これまで以上に意を強くいたしておるところでございます。

終わりに、本日の式典にご参列いただきました皆様に厚く御礼申し上げますとともに、動員学徒の御霊の永久の安らぎと皆々様の平安を心からお祈り申し上げ、式辞といたします。

理事長　本地正治

前日の様子

前日の様子

慰霊塔

追悼のことば

広島県知事
湯　﨑　英　彦

本日ここに「第六十七回原爆死没者追悼式」が執り行われるに当たり県民を代表し　謹んで追悼のことばを申し上げます

顧みますと　あの忘れることのできない日から　七十八年という歳月が過ぎ去りました

人類史上初めて使用された原子爆弾は　この慰霊塔の上空で炸裂し一瞬にして広島を焦土と化し　無限の可能性を秘めた　動員学徒や女子挺身隊の方々を始めとする　多くの尊い生命が失われました

祖国の発展と安泰を願い　建物疎開などに従事中に亡くなられた余りにも若い犠牲者の方々の無念の思いを推しはかる時　哀惜の念　胸に迫るのを禁じ得ません

また　最愛の我が子や肉親を失なわれた御遺族の皆様には　長い間言葉に尽くせない深い悲しみと多くの困難を乗り越えてこられたところであり　その間の御心労と御努力の程は　察するに余りあります

私たちは　先の大戦の体験から「あやまちは二度と繰り返しません」と固く決意しました

しかしながら　戦後生まれの世代が大多数を占める中　戦争体験　被爆体験の風化が懸念され　一方では今なお　恒久平和と核兵器廃絶への道のりには　険しいものがあります

こうした今こそ　原爆の惨禍を乗り越えた「ひろしま」には　「核兵器のない世界」に向けた強い思いを国際社会と共有し　平和と安定の実現に向けて　努力して行く責任があると考えます

そのためにも　戦争の悲惨さやそこに幾多の尊い犠牲があったことを次の世代に語り継ぐとともに　国の内外に　平和の大切さを強く訴えつづけていかなければなりません

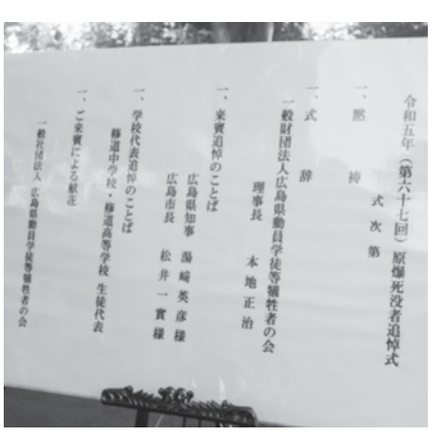
そして　この二十一世紀を　誰もが心豊かに暮らせる　より良い社会とするため　全力を尽くしていくことを　お誓い申し上げます

終わりに　犠牲者の方々の御冥福と御遺族の皆様の御多幸を　心からお祈り申し上げ　追悼のことばといたします

黙祷

黙祷

全景



令和五年（第六十七回）原爆死没者追悼式
一、黙　　祷
一、式　次　第
一、式　　辞
一般財団法人広島県動員学徒等犠牲者の会
理事長　本　地　正　治
一、来賓追悼のことば
広島県知事　湯　﨑　英　彦　様
広島市長　松　井　一　實　様
一、学校代表追悼のことば
修道中学校・修道高等学校　生徒代表
一、ご来賓による献花
一般社団法人　広島県動員学徒等犠牲者の会

式次第

名簿閲覧

祈り

広島市長
松井一實

本日、一般財団法人広島県動員学徒等犠牲者の会の主催により、第67回原爆死没者追悼式が執り行われるに当たり、犠牲者の御霊に対し、謹んで追悼の言葉を捧げます。

78年前、動員学徒、女子挺身隊員として、ひたすら我が国の安泰を願い、軍需工場での作業や建物疎開作業に従事されていた多くの方々が、一発の原子爆弾によって若くしてその尊い生命を奪い去られたことは、誠に哀惜の念に堪えません。また、最愛の肉親を亡くされた御遺族の皆様におかれましては、今なお、その悲しみはいかばかりかと御拝察申し上げます。

今日の我が国の平和と繁栄は、こうした多くの尊い犠牲の下にあります。私たちはこのことを決して忘れてはならず、同じ思いをする子供たちやその家族を生み出さないためにも、二度と悲惨な戦争を繰り返してはなりません。

しかしながら、ロシアによるウクライナ侵攻は長期化し、核兵器使用のリスクが懸念されるなど、緊迫した情勢が続いています。そうした中、5月に開催されたG7広島サミットでは、核保有国を含む各国の首脳が平和記念資料館の視察や被爆者との対話などを通じて、被爆の実相に触れ、核兵器のない平和な世界への願いを込めたメッセージを芳名録に残されました。また、原爆死没者慰霊碑への参拝・献花の際、私から、被爆者は、過去の悲しみに耐え、憎しみを乗り越えて「こんな思いをほかの誰にもさせてはならない」との思いで全人類の共存や繁栄を願っており、これがまさに「ヒロシマの心」であることを説明し、各国の首脳には、その思いをしっかりと受け止めていただいたと考えています。

本市としては、G7の首脳がサミットで世界に向けて発信した核兵器のない世界の実現という究極の目標に向けて、各国において具体的な行動が積み上げられるよう、本市が推進する平和文化の振興を一層強化し、核兵器のない平和な世界の実現に向けた機運の醸成に取り組んでまいります。

終わりに、御霊のとこしえに安らかなる御冥福をお祈り申し上げますとともに、御遺族の皆様の御健勝を祈念いたしまして、追悼の言葉とさせていただきます。

修道中学校・高等学校
生徒代表
秋本陸玖

本日、第六十七回広島県動員学徒等原爆死没者追悼式に参列させていただき、謹んで追悼の言葉を申し上げます。

七十八年前の今日、八月六日、午前八時十五分、世界初の原子爆弾がこの広島の空で炸裂し、一瞬にして街は破壊され、多くの尊い命が失われました。

被爆当時、市内には工場や建物疎開作業現場などで私たちと同じ世代の動員学徒や女子挺身隊の方々が働いておられ、そのうち七千人もの若い命が失われました。

私の通う修道中学校・高等学校の前身である旧制修道中学校でも、八月六日当日、動員されていた七百五十四名の内、生徒百九十五名、教員十名が犠牲になりました。

犠牲になられたみなさんが将来の夢を実現できなかったこと、離れ難き家族と別れなければならなかったこと、その悔しさと無念さを思うと心が痛みます。

生徒代表　秋本陸玖

また、ご遺族の皆様におかれましては、最愛の我が子や肉親を失われた悲しみや苦しみの大きさは、想像を絶する物であったと思います。

しかし、過去は変えることができません。

たとえそれが間違っていたとしても。

だから私たちは未来を変えるしかありません。

戦争の悲惨さ、原爆の恐ろしさ、命の尊さを伝えていかなければなりません。

それが私たちの使命です。

現在修道では、核廃絶を訴える署名活動への参加や、オーストリアで行われるＮＰＴ核不拡散条約 再検討会議への参加など、積極的に核廃絶に取り組んでいます。

私たちは、今の平和の中での豊かな生活が、戦前戦後の先人たちの努力によって成り立っていることを肝に銘じなければなりません。

その恩恵を被る私たちは、自分たちの使命を再認識し、果たしていきます。

最後に、若き学徒の皆様のご冥福を心からお祈り申し上げるとともに、ご遺族の皆様のご多幸とご健康を心から願い、追悼の言葉とさせていただきます。

私の伝承講話
―「一中生だった兒玉光雄さんの被爆体験」―（その二）

村　輿　久美子

そして、その後次々と襲って来た急性障害。８月10日から髪の毛が抜け始め、歯ぐきから出血。熱も出始めます。13日から高熱になって、目・耳・鼻からの出血。血尿・血便。16日には皮膚に紫色の斑点が出て、20日には熱が42度を越えて、血を吐いて、往診に来たお医者さまからは、「手の施しようがありません」と見放されてしまいました。それでもお母さんは必死で近所の山の上にある神社へ毎日お参りをされました。そして世間では、「原爆には毒がある」という噂が広まっていたので、お母さんは「体の毒にはドクダミ草が効く」とあらゆるドクダミ治療をされました。ドクダミの煎じ薬で口の中を拭き、うがいをする。生のドクダミ草を蒸して、それを傷口に貼って膿を吸い取る。部屋に染み付いた匂い消しには、生のドクダミ草で畳を拭く… そうしたお母さんの懸命な看病のおかげで８月末から熱が下がり始め、９月半ばにやっと体を起こすことが出来るようになって、10月になった頃から一人でトイレに行くことが出来るようになりました。

その後、徐々に体調は回復していきましたが、１～２年間くらいは下痢のような状態が続いたそうです。これは、放射線によって小腸が大きなダメージを受けていたからだそうです。

８月６日に登校していた一中の一年生３０７人の消息について分かっていることは、あの日建物疎開作業に出ていた約１５０人は全員死亡。崩れた校舎の中では約70人が亡くなり、何とか脱出して助かった約80人の中でも、翌年まで生存して学校に戻って来る事が出来たのは、わずかに19人という事でした。

しかし、奇跡的に生き残った至近距離で大量の放射線を浴びた一中の生徒19名には、誰も想像が出来ないような過酷な人生が待ち構えていました。その中の一人、K君は、高校２年生のとき野球部の練習中に突然鼻血が出て、二日間止まらなくなり亡くなりました。また、大学卒業を目前にした22歳の時、白血病で亡くなったというM君。そして35歳の時、幼い２人の子供を残して苦しみながら同じく白血病で亡くなったN君……続いて41歳44歳59歳70歳71歳、…それぞれ白血病や癌、脳出血で次々と亡くなっていきました。

何とか急性障害を乗り越えて、万全な体調ではないながらも、学校に戻ることが出来た光雄さんは、その後、郊外に移り住みました。そして、高校時代には、学業に加えて美術や文学といった分野でも充実した日々を過ごしていたそうです。その後、大学へと進み、就職してからも「原爆なんかに負けるものか」という強い意志も働いてか、大きく体調を崩すこともなく、国の内外を問わず、実に精力的に様々な分野の研究や仕事に没頭されました。この時代の兒玉光雄さんを知る人は皆、兒玉さんが被爆者だとは全く気付かなかったと驚かれたそうです。

被爆から48年後。兒玉さんが60歳の時に、初めて受けた人間ドッグで直腸癌が見つかり、手術で40㎝も切除しました。そして63歳の時に胃がん、65歳の時には、右の頬に皮膚がんが見つかりました。その後、全身に次々と皮膚癌を発症。70歳の時には甲状腺にも癌が見つかり、兒玉さんは実に22回もの癌の手術を受けられていました。

被爆から71年後、兒玉さんの体の中でまた一つ大きな病が姿を現しました。左の腎臓に癌がみつかり、手術に備えて検査をしていた時、血小板の数が異常に少ない事が分かり、手術を受ける事が出来なくなりました。その原因は、骨髄異型性症候群という病気。70年以上も前のあの一瞬の放射線が、とうとう兒玉さんの体の中の血液を作る幹細胞までをも破壊し始めたんです。

被爆から75年が経った三年前、88歳の兒玉光雄さんは、あの日の広島一中一年生３０７人の中のたった一人の生存者となられていました。新型コロナウイルス流行の中でも、兒玉さんは「無念の死を遂げた多くの友に代わって、生かされている私の使命だ！」という強い思いから、放射線の恐ろしさを一人でも多くの人に伝えていこうと一日一日を懸命に頑張っていらっしゃいました。しかし、とうとう10月28日に亡くなられてしまいました。

12歳の時、爆心地から８７６ｍという至近距離で被爆され、壮絶な人生を過ごされた兒玉光雄さんですが、生前いつも言われていたのは…『原子爆弾は、70年以上たった今も人を苦しめ続けている人類史上最悪の非人道性を持っていると思います。私は放射線の恐ろしさを身をもって知りましたが、世間では目で見えない放射線被害の実態が、あまりにも知られていません。しかし今現在も核実験は幾度となく行われ、また原子力発電所の事故などによる放射線の被害者は世界各国で増え続けているという現実があります。その重大な事に一刻も早く気づいてほしい。このままだと、人類は破滅して

しまいます。核と人類は絶対に共存できません。地球上でもうこれ以上私の様な人間を作ってはいけないんです。』

…と繰り返し仰っていました。

兒玉さんが亡くなられる3日前、核兵器禁止条約が発効されるという少し明るいニュースが流れました。

兒玉さんの奥様は、「生きているうちにこのニュースを聞くことが出来た事がせめてもの救いでした。」とご葬儀の時に仰っていました。

しかし、今、世界には１２５００発もの核兵器が存在しています。今、被爆者の方々が自らの辛い体験を心の傷をえぐりながら、命を削りながら伝えてくださる事、それは本当はとても辛いことだと思います。私たちはその思いをしっかりと受け止め、広島・長崎で実際に起きた事を理解し、78年以上経った今なお続く核兵器の本当の恐ろしさを実感し、また次の世代に伝え続けていく事が大切だと思います。

動員学徒をしのぶ　座談会（その五）

（昭和43年発行「動員学徒誌」から転載）

司会者（大東和徳雄）

本地さんは、二十年目の終戦記念日に相当する昭和四十年八月十五日に政府主催による第三回全国戦没者追悼式に参列されましたが、まだご記憶新たなるものがあると思いますが。

本地シズヨ

私は動員学徒遺族の母代表としてその式典に参列させていただきました。

会場にあてられていた日本武道館の長い廊下には遺児一万名の書が墨の香も新たに展示されていました。

式壇には国旗が飾られ中央の全国戦没者追悼の標柱は白と黄の菊花に埋もれその左右に、両陛下から賜わった菊花が薫り高く飾られていました。

両陛下は十一時五十三分、厚生大臣の先導で、国歌吹奏裡にご着席、佐藤首相の式辞が終わり全員起立と同時に両陛下が霊位の前にお立ちになり、正午の時報につれて全員黙祷を捧げ、続いて、天皇陛下からお言葉がありました。また遺族代表新井由松氏からふるえる声で「倅よ、お前の死は決して無駄ではなかった。」と慰霊の辞がささげられました。

その間、私は広島市民二十余万が火だるまになって、親は子を呼び子は親を呼んで、さまよいつづけた悲惨なあの日のことを思い続けていました。さらに戦後世の荒浪と戦いながら英霊の冥福を祈りつづけ、又残された弟妹たちの養育に努めた二十年の苦闘が、さながら走馬燈のように頭を去来しました。場内一杯の遺族は感無量のおももちで、ただすすり泣くのみでありました。式が終わっても誰一人退場する者もなくわが子わが夫をしのんで霊位の前で写真を撮っては名残りを惜しみました。この追悼の式の模様は永久に忘れることはできません。

私たちは愛児の死を無にしないため心を尽くして世界平和確立のために努力いたしましょう。

司会者

松本さんは遺族代表として靖国神社の合祀祭にご参列なさったのですが、ご感想を

松本昭人

娘信子（当時山中高女）は海軍関係の倉敷航空会社に動員中、原爆死したのですが、今回の合祀は軍属・動員学徒八一七一柱、陸軍軍人八六七五柱、海軍軍人四四〇三柱、合計二一二四九柱でありました。

代表参列は沖縄を始め各県代表2名ずつ九十六名でありました。広島県は動員学徒の犠牲者が多いので私が選定されたものと思います。

合祀祭は十七日夜十時頃から行なわれましたが、神社境内は灯火一つない闇の中にただ神社の鳥居前に篝火が焚かれているばかりでいとも厳粛なものでした。私たち代表は神殿で宮司さんが取り行われる斎事を心静かに拝承し神事が終わって昇殿参拝が許されました。参列者は神職さんと遺族のみでなんとも言えない神々しさでただ頭をたれて拝礼するのみでした。

翌十八日は、国会議員さんたちもご列席の上、拝殿での祭事が行なわれ、遺族には再び昇殿参拝が許されました。国のために犠牲になった人々をかくまで手厚く処遇されることに感謝すると共に嬉し涙が止めどもなく流れ落ちました。親としてはこの神に対し身を慎しみ心を正し社会のため更に一層の努力を傾けなければならないことを痛感いたしました。

司会者

遺族援助のことについては政府としてご配慮願ってはおりますが援護の暖かい手がまださし伸ばされていないお気の毒なご遺族も沢山あります。特にそうした方がご婦人に多いのは甚だ遺憾であります。岩田さん

や、由木さんなどは本当にお気の毒であります。

岩田シゲ

幼ない身で国歌の命令に服して戦禍のため犠牲となった原爆当時の動員学徒のことを思うと身の毛もよだつ思いがします。政府としてこれら犠牲者に対し手厚い援護の手が差し伸べられていると申しながら、大きな矛盾があると思います。私のことを申しては恐縮ですが私は三十代で夫と死別しました。学徒で被爆死いたした娘は当時三才でございました。

娘は原爆のとき高女二年生でした。家は全焼、私も被爆いたしましたが、幸い命は取り止めました。

息子は苦労して十八歳まで育てたのですが、自分で志願して昭和十三年に入隊、多くの中から軍楽隊に編入され、中支方面。各部隊を慰問のため差し向けられていたのです。その際の写真などいちいち送ってくれましたが突然「各部隊が日に日に減少しわれわれも楽器を捨て一線に立つ事になった。この手紙は母上には最後になるかも知れないが決して力を落さず奉公に励んでください」との便りがあったのが最後になりました。

夫の死後、ようやく一人前にした喜びも束の間子供二人までも戦死し身も心も尽き果てた思いでした。被爆した体でたちまち経済上の不安にさらされ途方にくれていると今は亡き母が心配いたしまして再婚を進めました。いままで子ゆえに再婚は夢にも思った事もない私は仕方なく再婚しましたが、年老いての再婚は決して幸福とはいえませんでした。

再婚して入籍。氏が変わったがゆえに国は恩典を与えてはくれません。再婚の夫も四年前に急死いたし今はひとりぼっちです。再婚しても入籍していない人には国は恩典を与えています。この事は法律の矛盾もはなはだしく、私には納得ができません。「再婚したものは、入籍、非入籍にかかわらず恩典はない」というのなら諦めもつきましょうが、あの規定は私にはどうしても納得いかないのです同じわが子を二人までも国に捧げたことも、しかも女手一つで涙ながらに養育してきたことも、すべて水のあわと消えてしまったのです。

どうか、あの法律の矛盾をただしていただきたいものです眠る子供たちは自分たちだけ人並みにしていただけない歎きを嘆いている事と思います。もしあれが改正されないのなら、子供二人を返してくださいと叫びたいです。

司会者

ごもっともです。続いて由木さんお願いします。

由木光子

八月六日、あの残虐悲惨な最期を遂げた動員学徒、広島県立第一高等女学校一年生住田緑子の母であります。

父は緑子が二歳の時に死亡しましたので、私はやもめながら男子洋服仕立業で生活を支え、母子二人の貧しく起き伏しながら張切った精一杯の生き方をしていました。

片親で財産とて無いが、せめても娘は女学校だけは卒業させたいと念願して、荒神町小学校から第一県女に受験させました。しかし子供たちにも入学の喜びは束の間でした。学校での勉強は勉強はできないばかりか毎日のように勤労奉仕でした。子供たちは銃後の守りとして、自分たちの果たす仕事は小さくとも、ただお国の為だと一生懸命でした。本当に美しい姿でした。

六日の朝は、あの稲荷橋の上からいつものように手を振りながら「お母さんいってまいります」と元気よく叫んでくれました。でもあの姿にも二度と触れることはできなくなったのです。現在生きていたならもう三十過ぎの人妻であり、母親であろうと思うと私の胸の中はやるせない思いでいっぱいです。

あの時、広島の街は生き地獄、戦争の犠牲としても余りにも残酷です。私は炎天の下を、毎日毎日娘をさがすため、鉄橋を渡っては、己斐小学校、お寺、草津小学校、あかつき部隊のあと、金輪島、似島鯛尾島と、死骸の山の中を歩きまわりましたが、ついに探し出す事ができませんでした。誰も彼も半裸か全裸です。可愛そうな子供たち、気の毒な軍人さん、一般勤労奉仕の人々、工場も会社も官庁も、市役所も死の海でした。

原爆をテーマとし、広島をテーマとした映画や小説を見ても程遠い感じです。

先日（二十五日）広島へ行き、原爆ドームのあたりに慰霊塔を建ててくださいますことを初めて知りました。

あの立札を読んで本当に嬉しうございました。無職の身には充分な事もできず本当に残念ですが、せめてもの気持ちから三千円寄附させてい

ただきました。締切りに間に合わないかも知れませんし、またおそらくは、私が最後の寄附者かも知れませんが、よろしくお願いいたします。

私は生きて行く為めに私と十二歳上の現在の夫と結婚しましたが、老人のため職もなく、その上、ソコヒを病み、片目は失明しました。遺族給与金はいただけません。何という不幸者かと思いますが、世の中には私よりもっと不幸な方があることを思い、元気を出しては娘の供養にいそしんでおります。

司会者

升田さんには、広島県動員学徒犠牲者の会の副会長として動員学徒慰霊事業の計画や推進に御努力されたのでありますが、定めしご苦心されたことと思います。ご感想を

升田健造

祖国を思うこと一筋に尊い一命を犠牲にした動員学徒の功績を長く後世に伝え、その霊を慰めるため慰霊塔の建設は早くから計画はいたしましたが、いろいろの事情で遅延し、やっと昨年七月十五日落成し、続いて学徒誌も刊行することになりました。この経費千八百万円は県市町村を始め、全国学校、各種団体、篤志家、遺族等皆様の温かいご援助によるもので本当に感謝に堪えません。又この事業は、役員中特別委員をあげてご尽力願ったので委員長のご努力に対して本当に頭が下がるのであります。

この事業が完成することによって、動員学徒の業績を明かにし、慰霊の誠がささげられるので遺族としては心しずまる思いです。太田川の河畔に聳え立つ慰霊碑は、当時、青空の志むなしく死没した学徒のゆ霊が空高く、のびのびと舞い上がり、平和を祈り、国民の行動を見守っているかのような感がします。私達もこの学徒精神を受け継ぎ国家の興隆に最全の努力を尽くしたものと決意します。

（つづく）

ご寄付お礼

令和５年６月から令和５年９月までに、次の皆様から貴重なご寄付をいただきました。ご厚志、誠にありがとうございました。

志水　清　様
米光　裕子　様
桑原　キヨコ　様
梶川　博　様
奥野　静子　様
能美　直哉　様
榎嵜　通子　様
西村　晴夫　様
石田　英雄　様
佐藤　恵子　様

ご寄付いただく際には、左記の口座へお振り込みください。

ゆうちょ銀行
振替口座　01300－6－8858
一般財団法人 広島県動員学徒等犠牲者の会

当会の活動へのご参加のお願い

みなさまご承知のように、当会では、原爆だけでなく、第二次世界大戦中に死没した動員学徒等の慰霊を目的に、役員が毎月、1回の読経と2回の清掃を継続実施していますが、役員はみな高齢となり、早晩活動に支障をきたすことが予想されます。

動員学徒のお子様、甥姪様、また、この会の活動主旨にご賛同の皆様、どうかお力をお貸しくださいませんか。

ご参加をお待ちいたしております。

（お問合わせは、事務局へお願いします。）

連絡先（TEL／FAX）082－252－0316

火曜日・金曜日の10時～15時に在席しております。それ以外は留守電になっております。

あとがき

今年の赤ヘルは当初の予想以上の〝2位〟で終えることができました。〝今年のカープはよくやった!!〟と思います。〝あの新井さん〟の人間的な魅力が、チームを家族一丸ならしめ、大砲も大投手もいないチームながら、随所に期待以上のパワーを発揮しました。なんといっても、7月12日からの嬉々の10連勝… 途中で何度も、うそじゃろう？ ほんまか？… が、今年の躍進の元ですよね。

とはいえ、自力で2位になれなかったこと、ファイナルステージで阪神に1勝もできなかったことは、残念、無念!!来季こそは、自力優勝以上を期待しましょう。きっと、〝あの新井さん〟ならやってくれるでしょう。（本地）